ぐるり庄原 カメラレポート
Look Around Shobara Camera Report

各地で行われたイベント＆話題をお届けします。

カープも参戦し95チームが熱戦
広島県雪合戦大会in高野

REPORT ①

広島県雪合戦大会が２月６日・７日の両日、高野スポーツ広場で開催されました。

県内外から95チーム、約1,000人が参加。開会式で名誉大会長の湯﨑英彦県知事が「雪合戦は"雪"という地域の宝を掘り起こしたすばらしい大会。日ごろの練習の成果を発揮し、交流を深めてほしい」とあいさつしました。

試合は、日本雪合戦連盟の公式ルールで行われ、１チーム７人が縦10m、横36mのコート内で対戦。選手たちはシェルターに身を隠しながら、１セット90個の雪玉を投げ合いました。駆け引きと迫力ある攻防に、観客から声援と拍手が上がりました。

▲スライリーが会場を盛り上げる

▲シェルターに隠れながら雪玉を投げる

この大会に広島東洋カープチームが初参加。元プロ野球選手もメンバーに加わりましたが、準決勝リーグで敗退。「雪合戦は頭脳とチームプレーが大切。来年も出場したい」と感想を話していました。

会場の一角には、雪遊びコーナーやバザーコーナーなどが設けられたほか、ステージでは、DJコーナーや聖慈保育園子ども神楽などが行われ、多くの来場者でにぎわいました。

「節分草」で少し早い春の出会い
総領の７自生地で公開が始まる

REPORT ②

節分草の自生地公開が２月13日から、総領町で始まり、多くの節分草ファンが自生地を訪れました。

公開される7カ所の自生地のうち、唯一南向きの自生地では、たくさんの節分草が開花。案内所でボランティアガイド「花守り」から節分草の説明を受けた観光客は自生地を訪れ、「かわいい」と言って写真撮影などを楽しんでいました。

▲道の駅で節分草を案内

▲手打ちそばなどのバザーコーナー

節分草案内所を設置した「道の駅リストア・ステーション」では、観光客をもてなそうと、自治振興区や地域団体がバザーを開き、地元の味を楽しむ観光客でにぎわいました

節分草自生地の公開は３月14日まで。期間中は土日を中心にバザーや山野草に関する講座や教室が開催されます。

夢は関取！東城中から角界へ
南場君の門出を祝い壮行式

REPORT ③

▲「横綱めざして!」拍手で送られる南場君

大相撲の佐渡ケ嶽部屋に入門することになった南場雄貴君（東城中３年）の壮行式が1月29日、東城町老人福祉センターで行われました。式には佐渡ケ嶽親方（元関脇＝琴ノ若）も駆けつけ、同級生や地域住民など約350人が参加し、門出を祝いました。

東城中の堀江信之校長は「日々のたゆまぬ稽古（けいこ）・精進により、心と技と体を磨き、宝石のように光り輝いてほしい」とあいさつ。生徒代表の3年毛利亮大君は「苦しいときは一緒に過ごした日々を思い出しがんばってほしい」とエールを送りました。

南場君は「自分で相撲界入りを決めた以上一生懸命がんばります」と決意表明し、親方と一緒にふるさと東城を出発しました。

佐渡ケ嶽部屋は、大関琴欧洲関や琴光喜関が所属。新弟子検査に合格すれば、同期7人と一緒に３月の大阪場所で初土俵を踏みます。

色鮮やかな「かきもち」完成
口和の食を楽しむ会

REPORT ④

「口和の食を楽しむ会」が１月31日、口和保健センターで開催されました。

これは、地域福祉の向上を目指す「口和里山倶楽部」が、口和町の旬の食材にこだわった調理や保存方法を学び、地域の交流の輪を広げようと企画しました。

今回は「かきもち」を作って食べようと、16人が参加。しそや紫芋、よもぎに黒豆から、ゆず、桜、卵といった少し変わったものも食材に加え、バラエティ豊かな「かきもち」に挑戦。でき上がった「かきもち」は、色も鮮やかで切った形も美しく、とてもおいしそうなものになりました。参加者はさっそく試食し、それぞれの味わいにほほを緩ませながら「これからも口和の食材の生かし方を考えながら楽しみたい」などと談笑していました。

▲かきもちを切る参加者

売れる商品開発のコツを学ぶ
農商工連携セミナー

REPORT ⑤

▲「庄原市の特産品も量目が多過ぎる」と指摘

地域特産品の売上げを伸ばそうと、「農商工連携セミナー」が１月29日、庄原市ふれあいセンターで開かれました。

備北商工会などが主催。市内の農業者や商工業者など約40人が参加しました。

(有)フィールドワークの碇（いかり）孝洋さんが「備北地域の資源を活用した商品開発」と題して講演。碇さんが手がけた商品開発を事例に「中身が同じでも、量目・容器・パッケージデザイン・表示（裏書き）を変えるだけでヒット商品に変わる。量目が多すぎると売れないし、パッケージデザインで中身の伝わり方が違う」などと商品開発のポイントをていねいに解説しました。

セミナーでは、農商工連携の支援や補助金についての紹介、個別相談も行われました。

REPORT ⑥

着衣に火が付いた男性を救護
消防功労者・塚本さんに感謝状

備北地区消防組合が１月28日、消防功労者として塚本定士さん（高町）に感謝状を贈呈しました。

塚本さんは旧高南小学校で、竹を焼却中に誤って着衣に火が付き、助けを求めていた男性を発見。急いでバケツに水をくんで消火し、119番通報しました。その後、やけどを負った男性を抱えて家の中に連れ帰り、近所の人に男性の看護を依頼。再び火事現場へ行き消火活動をしました。

男性は足や手にやけどを負い入院したものの命に別状はありませんでした。消防本部は「塚本さんの発見、消火、救護活動がなかったら、人命に危険がおよんでいた可能性がある」と功労を称えました。

感謝状を受け取った塚本さんは「すばやく到着した救急車を見て、これで命が助かるとほっとした。命に別状がなかったのが何より」と振り返りました。

▲消防長から感謝状を受け取る塚本さん

REPORT ⑦

新たな農業リーダーとして期待
総領の認定農業者が1人→3人へ

▲左から大元英夫さんと山根京司さん

総領町稲草の大元英夫さんと山根京司さんが市の認定農業者として認定され、1月20日、総領支所で認定証が交付されました。

認定農業者とは、意欲と能力のある農業者が自らの経営を計画的に改善するため、市町村の基本構想に沿った「農業経営改善計画」を作成し、市町村が認定する制度。これまで、市の認定農業者195人のうち、総領地域の認定農業者は１人だけでした。

２人は水稲を主に栽培し、農用地の利用集積や農作業の受託により規模拡大などに取り組み、農業経営の安定化を図るよう計画しています。今後、認定を機に総領地域の農業のリーダーとして活躍が期待されます。

REPORT ⑧

歌や踊りでふれあう
比和保育所と吾妻園が交流会

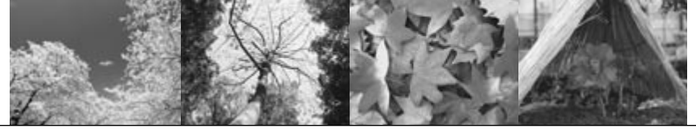
比和保育所園児28人（３歳以上）が１月27日、老人福祉施設「吾妻園」を訪問し、世代間交流を行いました。

これは、昨年10月に続き２回目。園児は安来節や八木節などの歌や踊りを発表。「幸せなら手をたたこう」を歌いながら、入園者の肩をたたいたり、握手をしたりしてふれあいました。

入園者は「かわいいのう～」と笑顔いっぱい。園児も「楽しかった」「おじいちゃん、おばあちゃんの笑顔がうれしかった」と喜んでいました。

比和保育所の松島やすえ所長は「これからもたくさんの人と出会い、色々な経験をして、心豊かに育ってほしい」と話していました。

▲銭太鼓を披露する園児



REPORT ⑨

地域食材生かした鍋囲み夢語る
西城里山倶楽部「鍋自慢！大集合！」

西城里山倶楽部の鍋チームが１月23日、「鍋自慢！大集合！」と銘打って、西城地域の産物を食材とした鍋を囲む行事を行いました。

この鍋チームは、庄原市の地域福祉計画を実施していくために結成された西城里山倶楽部の４チームの一つ。鍋を囲んでコミュニケーションを深めながら、気軽に話し合える仲間づくりを進めています。

会場となった西城ふれあいセンターには、野菜を提供する人、自慢の鍋料理を振る舞う人など、約30人が参加。西城の味覚が詰まった多彩な鍋料理を囲み、地域への思いやそれぞれの夢を語り合いました。

当日のメニューは、山里の冬の味覚「牡丹鍋」、西城に伝わる「雪けし鍋」、寒じめほうれん草の「豆乳鍋」、イタリアントマトを使った「トマト鍋」の４種。

参加者は「西城地域の魅力を私たち自身が再発見し、新たな地域活動の拠点となるよう、この取り組みを広げていきたい」と話していました。

▲４種類の鍋を囲み語り合う参加者

REPORT ⑩

海の子・山の子が雪遊び
「高野小と木江小」冬の交流会

▲かまくらを楽しむ木江小児童

高野小・木江小の冬の交流会が２月９日・10日の２日間、高野町で行われ、高野小学校の５・６年生40人と木江小学校の５・６年生17人が交流を深めました。

木江小の児童は到着するなり、校舎周辺の新雪の中に足を踏み入れ、雪の感触に感動していました。体育館の中で屋内雪合戦を体験した後、キャンプ場に設置された巨大なかまくらや雪遊びを楽しみました。２日目には、スキー交流を行いました。

この交流会は、平成14年に旧高野町と旧木江町が姉妹縁組を結んだことからスタート。夏は大崎上島町、冬は高野町で交流を深め、５年生は今夏の再会を楽しみにしていました。

REPORT ⑪

華麗なジャンプで観客魅了
高野でスキーモーグル大会

▲迫力あるジャンプに大きな歓声が飛ぶ

スキーモーグル大会「広島モーグル」が１月31日、高野町のりんご今日話国（きょうわこく）スキー場で初めて開かれました。

スキー人口が減少する中、スキーの楽しさを広めようと、県内の若者たちでつくるスキーサークル「うずしお組合」が主催。高野ジュニアスキークラブがコースづくりを手伝い、平均斜度20度のコースにこぶやジャンプ台を設けました。

大会には福岡県をはじめ県内外から約40人が出場。選手は、華麗なジャンプや迫力ある滑りを披露し、観客を魅了しました。

企画した増村元太さんは「このスキー場はモーグルに適したゲレンデで選手の評判も良く、来年もぜひここでやりたい」と話し、高野ジュニアスキークラブの井上憲さんは「小さなスキー場でも、特徴を生かすことで、多くの人を呼び込めるのでは」と今後に期待を膨らませていました。